

平成19年10月号(電子化38号)

- NATIONAL DIET LIBRARY
- 発行／国立国会図書館総務部

- ISSN 1344-8412

[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)



はじめに

『びぶろす』は、昭和25年4月に創刊し、以後行政・司法各部門の支部図書館と専門図書館の連絡情報誌として今日に至っております。より広い範囲への提供を考え、平成10年8月号で冊子体を停止し、10月から国立国会図書館ホームページで公開しています。刊行形態は異なりましたが、今後も当館、支部図書館および専門図書館の折々の状況を掲載して行きます。

* 本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して掲載される場合は、[サイトポリシー](#)をご覧ください。事前にご連絡ください。

SLA 2007 Annual Conference参加報告

葉山 和美

1.はじめに

SLA(Special Library Association)は、1909年にアメリカで創立され、現在では全世界に会員がいるInfoPro(情報専門家)のための団体である。その年次総会であるSLA 2007 Annual Conferenceが6月にコロラド州デンバーで開催された。今回、海外研修としてこのSLA 2007に参加したので報告する。

1-1. SLA 2007 Annual Conference概要

開催地デンバーはコロラド州の州都で、愛称Mile High Cityの名のとおり、標高1600mの高原都市である。最近ではデンバーを本拠地とするコロラド・ロッキーズに松井稼頭央が移籍したことから日本でも知名度が上がっているのではないかと思う。デンバーは1年を通して好天に恵まれ、夏は過ごしやすい気候のため避暑地として観光客にも人気である。市街地には西部開拓時代の名残を残す歴史的建造物も多くあり美しい都市であった。Conferenceの会場はコンベンションセンターとすぐそばのHyatt Regencyで、宿泊したホテルHoliday Innとはワンブロック程度の距離であったため、早朝のSessionの参加には便利であった。



写真1 左上:コンベンションセンター外観 右下:SLA Registry Counter

大会のスケジュールは表1のとおりである。SLAには分野によるグループのdivisionと地域によるグループのchapterがあるが(会員はそれぞれ1つのdivisionとchapterに無料で加入できる)、Registryをすると配布されるConference GuideにくわしくSessionやイベントの案内が記載されており、自分の所属するdivisionやchapterのものや興味のある分野のものを確認することができる。

Saturday, 2 June 2007 - Pre-Conference Activities		Tuesday, 5 June 2007 - Conference Activities	
8:00AM - 5:00PM	Continuing Education Classes: Complete offerings will be available in the preliminary conference program and the conference Web site in the months ahead.	7:00AM - 8:30AM	Concurrent Sessions: Complete offerings will be available in the preliminary conference program and the conference Web site in the months ahead. <i>Some events may require a separate ticket purchase.</i>
6:00PM - Midnight	Various receptions and Open Houses sponsored by SLA Units	9:00AM - 10:30AM	Concurrent Sessions: Complete offerings will be available in the preliminary conference program and the conference Web site in the months ahead. <i>Some events may require a separate ticket purchase.</i>
Sunday, 3 June 2007 - Pre-Conference Activities		Wednesday, 6 June 2007 - Conference Activities	
8:00AM - 12:00PM	SLA Leadership Development Institute	7:00AM - 8:30AM	Concurrent Sessions: Complete offerings will be available in the preliminary conference program and the conference Web site in the months ahead. <i>Some events may require a separate ticket purchase.</i>
8:00AM - 5:00PM	Continuing Education Classes: Complete offerings will be available in the preliminary conference program and the conference Web site in the months ahead.	9:00AM - 10:30AM	Closing General Session featuring Scott Adams .
11:00PM - 5:00PM	INFO-EXPO Open	11:00AM - 12:30PM	Concurrent Sessions: Complete offerings will be available in the preliminary conference program and the conference Web site in the months ahead. <i>Some events may require a separate ticket purchase.</i>
2:00PM - 4:00PM	INFO-EXPO Networking Reception	12:30PM - 2:30PM	INFO-EXPO Networking Lunch
5:30PM - 7:30PM	Opening General Session featuring Al Gore .	2:30PM - 4:00PM	Candidate Speeches
8:00PM - Midnight	Various receptions and Open Houses sponsored by SLA Units	2:30PM - 4:00PM	Concurrent Sessions: Complete offerings will be available in the preliminary conference program and the conference Web site in the months ahead. <i>Some events may require a separate ticket purchase.</i>
Monday, 4 June 2007 - Conference Activities		4:30PM - 5:45PM	Association Business Meeting and Report
7:00AM - 8:30AM	Concurrent Sessions: Complete offerings will be available in the preliminary conference program and the conference Web site in the months ahead. <i>Some events may require a separate ticket purchase.</i>	6:00PM - 7:00PM	Division and Chapter Cabinet Meetings
9:00AM - 10:30AM	Synergy Session , Moderator: Tom Hogan, CEO, Information Today, Inc., Panelist: Stephen Abram, Clifford Lynch, Eugene Prime ***NEW***	7:00PM - 10:00PM	SLA Salutes! Awards & Leadership Reception (<i>This is a separate ticketed event.</i>)
10:00AM - 5:00PM	INFO-EXPO Open	5:30PM - Midnight	Various receptions and Open Houses sponsored by SLA Units
10:30 AM - 11:30 AM	Networking Reception	Thursday, 7 June 2007 - Post-Conference Activities	
11:30AM - 1:00PM	Concurrent Sessions: Complete offerings will be available in the preliminary conference program and the conference Web site in the months ahead. <i>Some events may require a separate ticket purchase.</i>	8:00AM - 5:00PM	Various Tours sponsored by SLA Units. <i>Some events may require a separate ticket purchase.</i>
1:30PM - 3:00PM	Concurrent Sessions: Complete offerings will be available in the preliminary conference program and the conference Web site in the months ahead. <i>Some events may require a separate ticket purchase.</i>		
3:00PM - 4:00PM	Networking Reception		
4:00PM - 5:30PM	Concurrent Sessions: Complete offerings will be available in the preliminary conference program and the conference Web site in the months ahead. <i>Some events may require a separate ticket purchase.</i>		
5:30PM - Midnight	Various receptions and Open Houses sponsored by SLA Units		

表1 SLA 2007 Annual Conference のおおまかなスケジュール

今回は400以上の出展と5000人以上のConference参加があった。会期は2007年6月2日～2007年6月7日であったが、6月2日は主にContinuing Education(継続教育)、6月7日はSLAが主催するデンバー周辺のツアーが催され、6月3日から6月6日がAnnual Conferenceのメインであった。筆者は6月3日のINFO-EXPO Openから、Closingの6月6日まで参加した。

INFO-EXPOの開場に先立つイベント Open INFO-EXPO Grand Opening with Prize Drawing Announcement では、18世紀半ばメキシコからアメリカに移住したアステカのコスチュームをまとったネイティブアメリカンのダンスが披露され、主催者の挨拶の後に展示会場であるINFO-EXPO Hallが華やかにオープンした。



写真2 左上:ネイティブアメリカンのショー 左下:開催者の挨拶 右:INFO-EXPOの開場

2. Conference

朝はBreakfastから時には夜の12:00におよぶReceptionまでと、会期中は非常に忙しかった。筆者が所属するPharmaceutical and Health Technology Divisionでは、会期中Networking Breakfastが催されていた。SLAは情報交換をおこなえるような交流の場を設けているが、このNetworking Breakfastもそのひとつである。たいていはここで朝食をとりながら、旧交をあたためたり、情報を交換したりすることになる。Networking BreakfastではこのDivisionに関連したSessionのみを抽出した小冊子が配布され、スケジュールのチェックに非常に有用であった。筆者は初参加ということもあったのでPharmaceutical and Health Technology DivisionのSessionを中心に出席したが、もちろんどのDivisionのものでも出席は自由である。

次に出席したSessionの一部を紹介する。

2-1. Opening General Session featuring Al Gore



写真3 元副大統領 アル・ゴア氏

今年のKey Note Personは”不都合な真実”の著者としても知られている元副大統領のアル・ゴア氏であった。講演は情報の収集と利用についてであったが、InfoProは情報を収集・蓄積するだけはいけない、情報を外に出すことが必要であるということが主張された。そのなかでゴア氏は、彼が20年にわたって環境問題に

取り組み、その調査結果を公表して現在大きな反響を得ているが、それらはすでに研究者たちは事実として知っていたことであり彼らが外に出すというアクションを起こしていなかったため、“真実”が周知されることはなかった、という事実を挙げて、Informationは表出したknowledgeにすることが大切である、と述べていた。

2-2. Synergy General Session

(議長Tom Hogan: CEO, Information Today, Inc.、パネリストStephen Abram: Vice President of Innovation at SirsiDynx、Clifford Lynch: Executive Director of the Coalition for Networked Information、Eugenie Prime: formerly of Hewlett-Packard) “InfoProの将来はどのようになるのか？(どのようにあるべきか)”をテーマとしたSession。

Googleで簡単に検索できるような時代にInfoproはOPACの良さをユーザーにどのように伝えたらよいのか、を考えるべきであり、また、サーチャーは正しい答えを出すことを目的として調べるが、ユーザーは何か答えがでてくればよいと考えている、このギャップを理解する必要があるということが議論された。パネリストたちの共通した認識は、「世の中が変わっていることをInfoproも知るべきである」ということであった。

2-3. Toxicology Roundtable: Invisible Environmental Toxicants

有事の際の毒物特定や環境訴訟における適切な情報の収集と提供に図書館(情報センター)がどのように協力できるかについて2つの事例が報告された。いずれもlibrarianが積極的に情報の収集や提供にとりくむ姿勢が見受けられた。

2-3-1. Why Small Things Matter: Exposure to Amphibole Asbestos in Libby Montana (Christopher P. Wels: U.S. Environmental Protection Agency National Enforcement Investigations Center)

Montana州Libby鉱山のアスベスト被害訴訟におけるNational Enforcement Investigations Centerの取り組みについての報告。

Montana州Libbyでは1920年代から1990年の閉山にいたるまで、建築用の断熱材、防火吹き付け材Zonoliteの原料としてバーミキュライトを露天掘りしていた。Libbyで産出されたバーミキュライトにはトレモライト、アクチノライトが含まれており、産出時に放出されたバーミキュライトはアスベストに変化し、野山に放置されたため環境被害の危険性があると、EPA(U.S. Environmental Protection Agency)が認定し現在Zonolite製造会社と訴訟中である。National Enforcement Investigations Centerは現地を調査し、訴訟に必要なデータの収集に当たっている。Libbyにおける医学的なモニタリングの結果、Libbyの住民では18%、鉱山労働者では48%の生物学的影響が認められた。作業に基づいた曝露のモニタリングの中間結果では特定の状況下では重大な継続的曝露の可能性が示されている。Libbyにおける緻密なリスク評価のためにアスベストの人体への曝露を測定するには既存の技術を大幅に改良する必要がある。

また、この件はすでに閉山された鉱山での事例であり、アスベストの危険性が認知されていなかったため、当時のデータが残っているとしても十分に活用できていない可能性がある。そこで、埋もれたデータを発掘し、利用できるようlibrarianの協力が必要であるということであった。

この件については昨年SLAでも報告されており、訴訟中であるため発表できない部分もあるが、今後も報告を継続する予定とのことである。

2-3-2. Hazardous Materials, Crisis Situations, and the Role of Information Specialist (Dean Walton: University Libraries, University of Oregon)

有事における情報の必要性といかにして情報を収集し提供するかについての報告。

化学工場で事故が発生した実際の事例をもとにlibrarianがどのように関わるべきかを発表した。事例ではその地域の公共図書館などがネットワークを構築し、事故を起こした工場の概要を検索し、その工場で扱われている化学物質を特定し対策が立てられるように情報を提供した。この事例を紹介したなかでは、librarianが災害時/危機的状況への対応に関わることの必要性、どのような情報が誰に必要とされているか、どのような質問がlibrarianに寄せられるか、トレーニングの必要性などについて述べられた。librarianが把握しておくべき有用なデータベース、リソースとして、化学物質を調べるためのATSDR(Agency for Toxic Substances and Disease Registry: <http://www.atsdr.cdc.gov/>)、災害時のよくある質問を掲載したAmerican Red Cross (<http://www.redcross.org/>)、防災・危機管理の専門機関であるFEMA(Federal Emergency Management Agency: <http://www.fema.gov/>)ならびにその付属機関であるEMI(Emergency Management Institute: <http://training.fema.gov/>)のなどが紹介された。

また、Session出席者からもNLM(National Library of Medicine)が同様に有事の際の情報提供やネットワークの構築を行っているとの発言があり、未加入の図書館はNLMに是非連絡してほしいと呼びかけていた。



上 : <http://www.atsdr.cdc.gov/> 右 : <http://www.fema.gov/>より転載

図1 紹介されたサイトの一部

3. INFO-EXPO

INFO-EXPO Hallは会場が大きいこともあって盛大な印象をうけた。製品の紹介やデモンストレーションは各ベンダーそれぞれのブースで行われるが、そのほかに、特設会場で時間を決めてのプレゼンテーションがあり、興味のある製品があれば自由に聞くことができた。



写真4 左:INFO-EXPO 出展者ブース 右:Turning The Pagesのプレゼンテーション

各ベンダーの多くの製品のデモンストレーションやプレゼンテーションを見る機会を得たが、特に印象に残ったものとして英国図書館(The British Library: BL)のTurning The Pagesを紹介する。

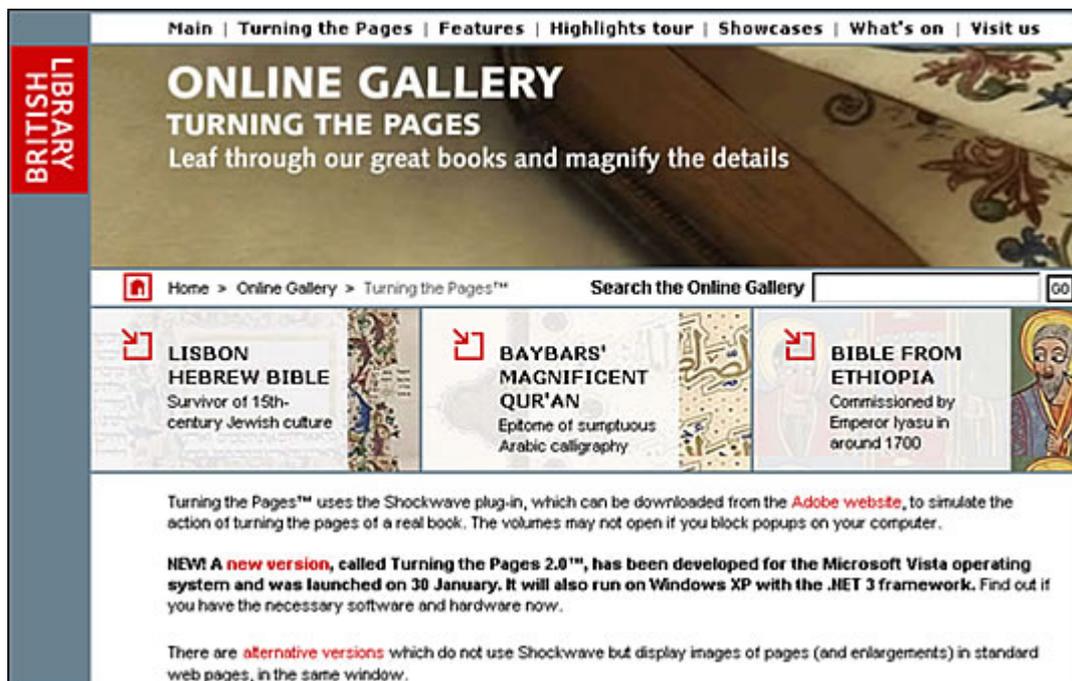
3-1. The British Library: Turning The Pages – “Bringing our Treasures” to Life Through Technology

Turning The PagesはBLの貴重資料のオンラインギャラリーである。今年の2月にバージョンアップし、Turning The Pages 2.0としてWebならびにCDで公開されている。BLの蔵書のデジタル化に協力しているマイクロソフト社とのコラボレーションであり、Windows Vistaの発売にあわせて発表された。

Ver.2.0ではオリジナルをスキャンして特別なプログラムにより立体的に再現し、ページをめくる、拡大する、個人的なノートを他人と共有する、付与された音声データを再生することにより朗読を聴く、ことを可能としており、デモンストレーションではビル・ゲイツの所有するレオナルド・ダヴィンチのノートが再生された。このダヴィンチのノートは分断されていたが、Turning The Pagesでは1冊にまとめられて復元されており、オリジナルが分断、破損している場合の安全な閲覧方法として期待できる。BLのサイトではこのほかに不思議の国のアリスのオリジナルなど、稀覯本が公開されている。

また、BLはTurning The Pages 2.0のオープンを期に、英国中の図書館から、電子化して公開すべき貴重資料を募集し、コンペティションを行うとも発表している。

このBLの試みは図書館の重要な役割である資料の保存と公開をどのようにすべきかを示す良い例と思われる。



<http://www.bl.uk/onlinegallery/ttp/ttpbooks.html>

図2 Turning The Pages

4. おわりに

SLA Annual Conferenceの参加は今回初めてであったが、SLAの活動が非常に活発でその内容が多岐にわたっていることに非常に感銘を受けた。参加者はSessionのみならずReceptionでも積極的に交流を持ち、意見を交換していた。各ベンダーも最新の製品を紹介するビジネスの場として力をいれており、また、スポンサーとしてもConference全体をサポートしていた。

全体を通して、運営者、参加者、ベンダーが一体となって盛り上げ、Conferenceを成功させようという意志が感じられた。専門図書館(特に企業内などでは)は職員1人という場合も多く、このような場で新しい知識を得ることやネットワークを築くことが大切であると思われる。筆者自身も日常業務に埋もれがちであったが、他のInfoProの活動や様々な新製品をみることにより非常に刺激を受けた。

なお、Closingではアメリカで人気の漫画家 Scott Adamsが講演したが、InfoProもストーリーテリングの能力が必要ということが、Adamsが選ばれた理由のひとつであり、SLAではストーリーテリング能力、さらには交渉力を重要なものとして考えていることがわかった。いずれのSessionにおいてもコミュニケーション能力の必要性が語られており、InfoProもビジネスパーソンとして周囲への働きかけをおこなうことが大切であると改めて実感した。

次回は2008年6月15日～2008年6月18日にシアトルで開催される。また機会があれば是非参加したいと思っている。

{(財)国際医学情報センター 東京分室}

[次の記事へ](#)

平成19年10月号(電子化38号)

- NATIONAL DIET LIBRARY
- 発行／国立国会図書館総務部

- ISSN 1344-8412

[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)



文化資源を作り出す-(財)渋沢栄一記念財団実業史研究情報センターの活動 -

小出 いずみ

◆はじめに

渋沢栄一記念財団は、近代日本社会の基礎をきづいた渋沢栄一(1840-1931)を顕彰し、栄一とその時代に焦点をあてたさまざまな事業を行っている。2003年11月に設置された実業史研究情報センターは、史料館、研究部につぐ渋沢財団で三つ目の事業部である。東京都北区の飛鳥山公園の栄一旧宅跡に渋沢史料館があり、旧庭園には重要文化財に指定された晩香廬、青淵文庫という二つの大正期の建物がある。財団は史料館の建物の中にある。

渋沢栄一が亡くなった後、彼を記念する事業として「日本実業史博物館」が計画された。これは大きく三つの部屋からなり、栄一個人の業績を顕彰する(青淵翁記念室)のみならず、栄一の活動を経済社会の変化という時代背景の中におき(近世経済展覧室、これが最大の大きさ)、その変化を担った人々にも注目する(肖像室)、という、視野の広い構想であった。この博物館のために資料が蒐集され、1939年には博物館建物の地鎮祭が行われたが、結局、戦争のために建設は断念され、蒐集資料は戦後、国に寄贈された。現在蒐集資料は、「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」として、独立行政法人人間文化研究機構国文学研究資料館に所蔵されている。

実業史研究情報センターの使命は、この博物館構想を現代的な形で実現することである。とはいっても、資料はすでに財団のものではなく、あらためて同じ規模の資料を蒐集することは不可能である。そこで、この博物館を構想した渋沢敬三(1896-1963)の学術研究資料に対する方法論に倣い、情報資源化するという手法で文化資源を作り出すことになった。栄一の孫にあたる敬三は、経済人であると同時に、民俗学の発展や庶民史料の蒐集に大きく貢献し、庶民の日常生活を文化資源とすることに情熱を傾けた人物であった。

現在の活動は、主に三つの領域で行われている。一つ目は渋沢栄一に関する領域である。二つ目は経済社会の変化を表している実業界についての領域で、社史を取り上げている。三つ目は、実業史関係の錦絵など旧蔵コレクションの特徴的な画像資料を使った領域である。

◆デジタル伝記資料

渋沢栄一に関する領域で大きな仕事としては、『渋沢栄一伝記資料』(以下『伝記資料』)のデジタル化が上げられる。『伝記資料』は、渋沢栄一の伝記をまとめるための資料集で、編纂主任は土屋喬雄、本編全58巻が渋沢青淵記念財団竜門社編、渋沢栄一伝記資料刊行会刊(1955-1965)、別巻全10巻は渋沢青淵記念財団竜門社刊(1966-1971)、全部で約48,000ページに上る。書簡や日記、講演録を始め、公的な文書、新聞報道など同時代の記録や出版物が収録されている。内容は、渋沢栄一の活動の幅広さを反映して経済活動から社会事業、国民外交まで、「実に幕末以来、明治、大正、昭和の三聖代に亙る経済方面の史実を始め、政

治、外交、社会、教育、宗教、文化、学芸、等等に関する諸般の状況を知悉せしむる上に資するところ、恐らく多大なるものあるべきを信じて疑はない」と序文に記されている(注1)ほどである。『伝記資料』は当財団にとって基幹資料であるが、余りにも膨大で、索引巻(注2)があってもそれで中の情報を有効に引き出すことは簡単でない。そこで、もっと様々な研究や分析が容易にできるように、全文をデジタルテキスト化する作業を行っている。

量の多さもあって、入力文字精度の水準を保つことはやさしくはないが、この事業で直面している一番の問題は、入力文字の問題である。一昔前は、コンピュータ処理できる漢字の種類が制限されていたので、返って明瞭に使用文字を決めることが出来た。最近ではその制限が段々と小さくなり、使用文字種が増加してきつつあるが、かといって活字のように全て使えるかというと、そうではない。目的は検索にあるので、原文に使用されている文字を表示させることだけではなく、検索時に何が入力されるかも考えなければならない。資料の原文になるべく近いものを使用しつつ、検索してヒット効率の高いデータを用意するにはどうしたらよいか、頭を悩ませるところである。国立国会図書館憲政資料室のテキスト化の経験などいくつかの先行事例を参考にさせていただきながら、取り組んでいる。

一旦入力 completed 後はデータベースの構築作業に入り、同一人物が異なる名称で出現している場合にも同時に検索できるよう、辞書など同義語処理の仕組みを考えていく予定である。

『伝記資料』は、多くの編纂史料集と同様、それぞれの標目に対し、綱文、つまり、いつどんな出来事があった、という概要が記され、その下にそれに関する史料を掲載している。そして目次にはこの綱文が記載されているので、目次を読むだけでも概要がわかるような構成になっている。デジタル化が進行途中、完成にはまだ間がある現在、少しでも『伝記資料』が使いやすいように、本編57巻までの目次をウェブ上に公開している。

<http://www.shibusawa.or.jp/eiichi/mokuji.html>

◆社史

社史に関する領域の仕事には、現在三つのプロジェクトがある。そのうちの一つは刊行された社史についての社史索引データベース作りである。

会社の歴史を記した出版物である社史は、これまでに国内で1万4000点余(注3)出版されていると推定されている。しかし編集者も出版者も会社自身、つまり出版のプロでなく、また非売品であるため、発行状況も出版情報も把握しにくい団体出版物、いわゆる灰色文献である。しかし社史には通常は公表されない会社の生産や営業状況など経済活動の記録をはじめ、商品開発のコンセプトや技術開発の歴史、さらにその会社の製品やサービスを取り巻く業界や社会の状況、消費者にどう受け取られたか、コマーシャルが作り出した文化など社会との関わりまで、記録されていることが多い。この刊行物群を情報資源化するのが、社史索引データベースの目的である。

そのためにどのようにデータを作るのがよいか、社史は書誌情報が安定していないなど様々な問題がある中で、何をデータ化すると効率的に社史に含まれている情報を引き出せるかが、大きな検討課題であった。結局、索引語の付与など知的加工はせずに、最小限の労力で効果を引き出す方法として、個々の社史から目次、索引、資料編、年表の4種の情報をデータ化することにした。2007年7月末現在、141社、245タイトル、302冊の社史が入力済みで、合計535,521件にのぼるデータが蓄積されている。入力する社史は、渋沢栄一が関係した会社のものを優先的に選んでいるが、将来はそれに止まらず、それ以外の日本の会社の社史からも広くデータを採取しようと考えている。現在はデータ化作業とデータの蓄積を進めている段階で、検索システムの構築はこれからの課題である。

社史索引データベースが使えるようになるまでには、まだ時間がかかるが、すでに入力した社史は、ウェブ上で紹介している。

<http://www.shibusawa.or.jp/center/shashi/shashi01.html>

◆社名変遷

渋沢栄一の活動は余りにも広範にわたっていたので、「渋沢栄一が関係した会社」がどれか特定することは、単純ではない。渋沢栄一が関係した経済関係の役職は、約500とも言われている(注4)が、この中から経済団体などを除いて会社だけに絞って『伝記資料』事業別索引を見ても、360余りある。その上、『伝記資料』に記されている会社がその後どうなったか、今のどの会社につながっているのかも、確定的な調査がなされていないことから、把握できていない。したがって、渋沢が関係した会社の変遷を追わないと、関係会社の名

称を特定することもできない状態である。

そこで、渋沢栄一が関係した企業を把握するために、渋沢関係会社の名称変更データベースを作成しようと、現在調査を行っている。有価証券報告書や営業報告書などの資料にあたって変遷を調べているが、調査結果がまとまり次第、ウェブで公開する予定である。社名変遷についてのデータベースでは、東京銀行協会銀行図書館が銀行変遷史データベースを公開していて、これがモデルの一つになっている。

◆企業史料

日本では、企業史料保存についての法的な定めはない。企業の歴史を示す記録や史料は、企業経営の記録という観点から重要であるのは言うまでもない。過去の経験から学ぶことによって、企業にとって有形無形のリソースが確認でき、リスクの回避やあらたな経営戦略の展開にも役に立つ。企業倫理が問われている昨今であるが、会社が説明責任を果たすためにも、企業史料は重要である。また、会社の歴史には、その企業に働く人々はもちろん、企業の製品・サービスの消費者や取引先などとの関係が反映されており、社会の変化が企業の歴史と密接に関わっていて、社会的存在としての企業を研究するためにも重要な資料である。このような企業史料は、刊行物の社史を編纂するために社内で集められ、社史が出版された後には、その重要性が認識されて、企業博物館や企業史料館が設立されることもある一方、残されないことも多い。実はこれは何も企業に限ったことではなく、様々な組織で年史を作成した後に頻繁に起こることである。組織体の記録を系統立てて保存し過去の経験知を活かしていく、機関アーカイブズ(注5)の制度は、日本に根付いていないようである。

センターが行っている社史に関わるもう一つの仕事は、このような企業史料に関するものである。ビジネス・アーカイブズの振興を目的として、このような企業史料が、どのような規模でどこに残されているか、企業史料の所在について調査して情報を集約するものである。企業史料は、親組織である会社がすでにない場合には、大学図書館など公共的な機関に所蔵されていたり、企業博物館や郷土資料館に保存されていることもある。むろん企業内に史料として保管されていることもある。企業の記録史料の所在調査の結果は、企業史料ディレクトリーとして公開する予定である。現在は、調査協力機関が閲覧できる名鑑となっている。

<http://www.shibusawa.or.jp/center/shashi/shashi07.html>

◆錦絵

日本実業史博物館の構想の中で特徴的な資料に、多色刷りの木版画である錦絵があった。旧構想で集められた錦絵については、国文学研究資料館の電子資料館で画像データベース「実業史絵画データベース」として(<http://archives2.nijl.ac.jp/jkdb-index.htm>)公開されている。

この博物館のために錦絵が蒐集されたのは、写真が普及していなかったころの視覚的な伝達手段として、社会全体に広い範囲で革新が起こった明治期には、その様子を伝える錦絵がいろいろな形で出版されたからである。センターでは、実業のさまざまな場面を描く錦絵とその関連情報を集約し、日本の経済社会の近代化、産業化について視覚的な面からも研究できるよう資源化することを目指している。具体的には、錦絵に描かれたものを言葉であらわし、絵引きを作成しようと計画している。絵引きは、旧博物館の構想者であった渋沢敬三の仕事でもあった(注6)。

◆おわりに

渋沢栄一記念財団には、渋沢史料館があり、渋沢栄一に関する展示を中心とした博物館活動を行っている。実業史研究情報センターとしては、通常の「図書館」のような物理的な公開された閲覧スペースは現在のところ持っていない。閲覧スペースはウェブ上にある。実業史研究情報センターは設立後日が浅いため、ウェブの情報充実はこれからの段階であるが、使っていただける文化資源を少しずつ増やしていく予定である。

資料や情報を収集し、整理し、提供する、という図書館の専門知識と技術、つまり情報資源化の能力を用いて、様々な文化資源を作り出すのが当センターの手法である。「資料」は出版物とは限らない。版画あり、デジタル資料あり、文書や写真などの一次資料あり、と形態が多岐にわたるので、「図書館」の範疇には入らないように見えるかもしれない。しかし実施していることは参考業務のツールを作るのと同じ、蔵書構築、目録作業とも同じ目的で行われている。つまり、実業史研究情報センターでは、資料や情報と利用者を結びつける、という図書館員の仕事の精髓を応用して、文化資源を作り出している。

(注1) 第1巻 p.9-10。

(注2) 第58巻は、分類された会社名や事業名ごとに出来事を並べ、本文に記述されているページを指示する事業別年譜(約300ページ)と、編部章節款とその下の細目までをリストした総目次と五十音順款項目索引(合計約50ページ)からなる。

(注3) 明治以降2000年までの既刊社史は2001年7月現在、1万3,166点、1980年代頃の年平均出版点数300点。村橋勝子『社史の研究』(ダイヤモンド社、2002)p.12。

(注4) 「『渋沢栄一伝記資料』編纂の際に数えてみたところ、実業・経済関係の役職は約五百なのに比し、公共・社会事業関係の役職は約六百あった。」(土屋喬雄『渋沢栄一』吉川弘文館、1989. p.258)

(注5) institutional archives: A repository that holds records created or received by its parent institution. (Richard Pearce-Moses, *A Glossary of Archival & Records Terminology*. Chicago: The Society of American Archivists, 2005)

(注6) 『絵巻物による日本常民生活絵引』(角川書店、1964-1969)

(渋沢栄一記念財団 実業史研究情報センター長)

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

平成19年10月号(電子化38号)

- NATIONAL DIET LIBRARY
- 発行／国立国会図書館総務部

- ISSN 1344-8412

[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)



平成19年度専門図書館協議会全国研究集会に参加して

川上 洋一

1 はじめに

本年5月31日(木)、同年6月1日(金)の2日間、東京都江東区の日本科学未来館において、平成19年度専門図書館協議会総会・全国研究集会が開催されました。

今回の全国研修集会の総合テーマは「立ち上がれ！ライブラリアンNEXTステージへ…」として、第1日目は「ドラッカー経営思想の神髄～情報革命とその中での知識人の役割と働き方」と題して、ものづくり大学名誉教授上田惇生氏の基調講演が行われ、第2日目は6分科会(午前3分科会、午後3分科会)及び全体会が行われました。

そこで、私が参加しました第2日目の第1分科会、第5分科会及び全体会の内容につき、その概要等を紹介させていただきます。

2 第1分科会

午前に行われた第1分科会では、「著作権問題とライブラリアン」をテーマに、2名の講師による講演が行われました。

(1)「著作権問題の動向とライブラリアンの著作権認識」

講師：筑波大学大学院図書館情報メディア研究科教授 山本順一氏

著作物とは、「思想または感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術または音楽の範囲に属するもの」と定義されるが、これは特定個人が考えた、感じた、思ったことを表現することによって、著作物ができることとなり、現代社会においては「万人がクリエイター」状態である。

ア 近代的著作権制度の歴史

著作物には、「消える著作物」(講演等)と「消えない著作物」(文字で書かれた著作物等)があるが、西洋における15世紀の活版印刷の発明・普及によって、大量に複製が行うことが可能となったことで、出版物に対する著作権という考え方が現れた。これが、近代的著作権制度の誕生であり、それは18世紀初頭のことである。その後、その法的保護対象著作物が音楽や美術等にも拡大されることとなった。近代的著作権制度とは、特定個人が制作した著作物について、一定期間その利用を著作者に独占することを法的に認める制度であるが、この著作権制度の国際標準となるのが1886年に締結されたベルヌ条約である。

イ 著作権制度の目的

優れた著作物の製作者に対して、第三者がそれを利用しようとするとき、許諾と引換えに経済的対価を得さしめることによって、そのうまみを味わった著作者をさらなる経済的利益の獲得に誘導し、多くの優れた著作物の継続的生産に結びつけ、結果的に学術、文化の向上を実現することを目的としている。

ウ 著作者の権利

著作者の権利には、人格的な利益を保護する「著作者人格権」と財産的な利益を保護する「著作(財産)権」がある。「著作者人格権」には、「公表権」「氏名表示権」「同一性保持権」がある。「著作権」は権利の束であると言われており、その内容として「複製権(コピーライト)」「上演権及び演奏権」「上映権」「公衆送信権」「口述権(朗読)」「展示権(美術の著作権)」「頒布権(映画の著作権)」「譲渡権」「貸与権」「翻案権」「二次的著作物の利用に関する原著作権者の権利」がある。

エ 著作物の種類

「著作権法」上、9種類の著作物(「言語の著作物」「音楽」「舞踊, 無言劇」「美術」「建築」「地図, 図形」「映画(動画)」「写真」「プログラム(ソフトウェア)」)が例示的に明記されているが、これら9種類の著作物は排他的なものではなく、重疊的なものである。また、これらの著作物には、コンピュータという機械に対して、その部品となる無機的な指令群にすぎないプログラムも含まれている。

オ 著作権の権利制限にかかる諸規定

著作権法の趣旨である文化学術の振興のために公共・公益的な観点から、権利制限にかかる諸規定がおかれている。図書館とその業務については、複写サービスのほか、文化財保全、私的使用、非営利無償の利用などの法原理が適用される。

カ デジタル・ネットワーク社会における著作権問題

汎用複製機械であるコンピュータと、オリジナルと複製劣化をまぬがれた全く同じデジタル複製物を大量に増殖流通させる伝送路であるインターネットが普及した現代は、いわゆるスーパー・コピー社会でもあることから、違法コピーを制御するために公法的規律が必要とされる。しかしながら、著作権制度の目的である学術・文化の向上に損ねない配慮も必要となり、利害関係が輻輳することとなる。

今後、デジタル化、ネットワーク化の進展によって、デジタルコンテンツの遍在、大量複製、大量改変といった状況が生み出されてくる中で、著作権法はきわめて頻繁に改正され、不安定なものとなってくる。

(2)「専門図書館業務と著作権」

講師: 複写と著作権メーリングリスト主宰者 末廣恒夫氏

ア 図書館業務に関わる著作権

○閲覧と「上映権」

マイクロフィルムをマイクロリーダーに表示することや、CD-ROM, DVDをパソコンのディスプレイに表示する行為は「上映」に該当する行為となり、「上映権」が関わってくる。

○閲覧と「展示権」

「展示権」は、美術の著作物と未発行の写真著作物の原作品のみ及び、書籍・雑誌の展示には及ばない。

○貸出と「貸与権」

平成16年の著作権法改正によって、書籍・雑誌にも「貸与権」が適用されることとなった。原則として、著作権者の許諾なしに貸与を行うことはできなくなった。ただし、「貸与権」には権利制限規程があり、「非営利」かつ「無料」の場合は「貸与権」は及ばない。企業内専門図書館における貸出と「貸与権」の問題は、「非営利かつ無料」の貸与に該当するかの判断となるが、「非営利」と認められる可能性は低いのではないか。この場合、「無料」であっても「営利」となると権利制限が及ばなくなる。

○ファクシミリ送信等と「公衆送信権」

ファクシミリでの文献送信、電子メールによる文献の送信等の行為は、「公衆送信」とみなされるため、「公衆送信権」が関わってくる。「公衆送信権」には権利制限の規程がないので、全ての「公衆送信」に許諾が必要となる。

イ 複写と著作権

○複写と「複製権」

複写は、「複製」に含まれる。「複製」は、「媒体」「手段」「著作物の種類」を問わない。

○「複製権」の制限

「複製権」に関わる権利制限で「専門図書館」に関連する著作権法の条項については次のものがある。

私的使用のための複製(第30条)については、原則として、民間企業で行われる「複写」には該当しないとされている。

図書館等における複製(第31条)について、専門図書館が本条項の図書館の対象になるかは、図書館法に

における「私立図書館」の要件を満たすところであれば、対象となる。

また、平成18年の著作権法改正により、「特許審査」「薬事審査」などにおける複製についても、権利制限が認められた。(第42条)

○著作権等管理事業者(集中処理機構)

権利制限に該当しない「複写」を行う場合には、「著作権処理」を行わなければならないが、許諾の処理を軽減するために「集中処理機構」がある。

○著作権処理における現状の問題点

「集中処理機構」が複数存在しており、それら団体が管理している著作物を統合的に調べる手段が存在していないため、著作権処理を行うためにはすべての団体において管理著作物を確認する必要がある。

また、「集中処理機構」に委託していない著作物も存在し、それらの著作権処理の問題もある。現状は、利用者は著作物を利用しづらい状況である。

ウ 専門図書館と著作権

以上のような著作権にかかる状況の中において、ライブラリアンは、著作権についての知識の取得はもとより、著作権法の改正の動向についても常にウォッチングする必要があり、パブリックコメントの提出、法改正への意見提出等の図書館職員団体としても役割を果たしていくことが重要である。

3 第5分科会

午後に行われた第5分科会では、「図書館運営の一考察／先端事例に学ぶ」をテーマに、2名の講師による講演が行われました。

(1)「図書館のリストラから六本木ライブラリーの創設へ」

講師:アカデミーヒルズ六本木ライブラリー 小林麻実氏

企業においては、スペース及びスタッフの観点から、図書館を維持する余裕はないと考え、図書館自体を廃止する例も珍しくなくなりつつある。また、インターネットが普及した現代において、文献等資料はネットで検索及び電子情報を閲覧することができ、書籍についてもネット注文すると自宅に配達されることも、図書館不要論の根拠の一つであると思われる。

このような状況の中で、企業における図書館は、収益を生み出していることを証明できなければ、存在できなくなってきている。そこで、問題になるのは、図書館における収益とは何か、また、収益をどのように算出するかである。

企業内図書館は、企業の本業ではなく、本業をサポートするものであると考えられているが、図書館を一つの企業体と考えた場合、図書館経営という視点から収益を考えることができるのではないか。

六本木ヒルズに収益のある事業としてのライブラリーを創設するに当たって、会員制ライブラリーとしてどのような人が会費を払うのかといったところから検討を始めた。検討に当たっては、会費を払う人(顧客主義)と、既存図書館への不満を解消するものといったことについて考えていった。

その結果、六本木ライブラリーでは、「原則新刊書のみ、書店と同タイミングで入荷」として保存は考えないものとし、「カフェラテ、ビール、ワインを飲みながらの読書」を楽しめ、「PC、ネットの使用も可」とした。また、「貸出、複写サービスは提供せずにブックストアを設置」することによって、著作権と情報に出会う「場」を重視したものとした。

これからの図書館は、「図書館に何を求めているのか」といったことを意識しながら、図書館はどのような収益を生み出しているのかについて、社内外にアピールしていかなければならない。

(2)「ライブラリアンのための広報戦略マニュアルー専門性を訴求する5つのポイントー」

講師:早稲田大学図書館 仁上幸治氏

図書館員の自己イメージは社会的イメージと大きく乖離している。社会的に認識されている図書館員像は、融通が利かない、サービス精神と専門職業意識が低い、仕事は定型業務ばかりといったものである。

このようなイメージは表面上のものではなく、社会的な評価そのものであることを認識する必要がある。

図書館業務における広報活動とは、従前考えられてきた「お知らせ」や「一方通行の情報伝達」ではなく、パブリック・リレーションズ(PR)という本来の世論形成手段である。

また、図書館員のイメージの形成においては、実際の図書館の現場で利用者本位のサービスを徹底的に展開することが必要不可欠である。

つまり、利用者本位のサービス改善や業務の合理化を積極的に行い、そのことに対し、利用者に理解、共感、参加、協力が得られるよう広報戦略を練るとともに、新しい専門性として学術情報リテラシー教育を支援するための専門的な知識と技能を取得する必要がある。

このことによって、新しい図書館員像を創造し、専門職としての社会的評価を回復・向上させていくことができるのである。

広報活動については、戦略的に行う必要があるが、利用者に対しては、まず、図書館の存在について「印象づけ」を行い、図書館を快適、便利、気軽、自由、信頼性といったイメージを持ってもらう必要がある。

そのためには、職場のカルチャーを変え、オリエンテーションや講習会を変える必要がある。

4 全体会

全国研究集会の締めくくりとして、全体会が行われました。全体会では「立ち上がれ！ライブラリアンNEXT ステージへ向けて、専門図書館員に求められるもの」と題して、各分科会のテーマを踏まえ、ファシリテーターに越山素裕氏(清水建設株式会社、専図協広報委員長)、パネリストに仁上幸治氏(早稲田大学図書館)、岡本真氏(ACADEMIC RESOURCE GUIDE編集長)を迎えて、参加者とパネリストの間で議論が交わされました。

まず、問題提起として、越山氏から、「著作権処理」、「IT化と図書館の評価尺度の問題(従前の評価尺度として来館者数、貸出冊数であったが、IT化に伴い新たな尺度が必要となるのではないか)」、「広報活動」「IT化に伴う図書館業務の変化(例えば、資料の修繕とデジタルアーカイブとの関係、蔵書管理とデジタルコンテンツの整備との関係等)」の話があり、岡本氏からは、「専門図書館員に求められるもの」として、現状のwebへの取り組みについてあまり進展していないのは、図書館員の知識・経験不足や意欲の欠如といった傾向が見られ、危機感が不足しているからなのではないかといった話があった。また、仁上氏からは、広報活動や顧客満足度向上について、生き残るための戦略と作戦、フォローアップが重要ではないかとの話があった。

パネルディスカッションでは、「企業図書館」の生き残りについて、既得権益の意識があるので危機意識が少ないのではないかといった意見や、「図書館不要論」に対抗するために図書館の必要性について社内(組織内)への広報といった視点や、「情報サロン」、「コミュニティ」、「情報に会う場」をつくっていくことが重要ではないかといった意見が出された。また、オリエンテーション等は、図書館の存在を知らしめる場であり、戦略的に広報活動を行っていくこと、図書館に来るかどうかも大事であるが、来なくても、利用してもらえればいいので、図書館が組織の中で果たすべき機能、どのように使われているかをリサーチし、図書館に足りないものを知ることが必要であるとの意見が出された。図書館の必要性の説明のためには数字を出さなければならないが、IT化の中でもデータベースのアクセス件数や検索件数等の数値を利用することができるのではないかと、経済的効果についても、有料で情報提供を行ったり、レファレンスを有料にするといったことも一つの方法ではないかといった意見も出された。

5 おわりに

今回、専門図書館協議会の全国研究集会に初めて参加させていただきましたが、現在の情報化時代の流れの中で、図書館及び図書館員を取り巻いている今日的な課題に合わせたテーマを設定して分科会を設け、そのテーマを検討する上で参考となる講師の方々のお話をうかがうことができ、今後の図書館に求められていること、その実現のために図書館員は何をしなければならぬかを考え、実践を行っていくために必要なノウハウが詰まった研究集会でした。私自身、今、図書館を取り巻く状況がこんなにも厳しく、たくさんの課題があることについて気付かせていただき、とても有意義な機会となりました。

最後になりましたが、講師の方々をはじめ、今回の全国研究集会の開催に関わったすべての方々に対し、感謝申し上げます。

(前支部法務図書館)

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

平成19年10月号(電子化38号)

- NATIONAL DIET LIBRARY
- 発行／国立国会図書館総務部

- ISSN 1344-8412

[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)



平成19年度行政・司法各部門支部図書館職員への感謝状贈呈

平成19年9月7日(金)支部図書館職員1名に対して、長尾真国立国会図書館長より感謝状が贈られました。感謝状は昭和57年国立国会図書館内規第5号により、支部図書館職員のうち10年以上支部図書館に勤務し、支部図書館の向上発展に寄与した人に贈られています。

贈呈式後、総務部長、総務部司書監ほか支部図書館・協力課職員と懇談しました。

感謝状を贈られた人

支部会計検査院図書館 大久保 郁子



(前列左から吉永総務部長、長尾館長、大久保氏、生原副館長)

(国立国会図書館総務部支部図書館・協力課)

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

平成19年10月号(電子化38号)

- NATIONAL DIET LIBRARY
- 発行／国立国会図書館総務部

- ISSN 1344-8412

[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)



国立公文書館秋の特別展「漢籍」の御案内

国立公文書館では、毎年、春・秋の2回、特別展を開催しています。

国立公文書館が所蔵する漢籍は、国内だけでなく海外でも高く評価されています。江戸時代の将軍家の紅葉山文庫や湯島の昌平坂学問所に伝えられてきたもので、その由来が明らかなものです。

平成19年秋は、「漢籍」と題し、ふだん漢籍にはあまり縁がない方々にも、その面白さなどを認識していただくために、国の重要文化財に指定されている漢籍を多く展示します。

是非多くの皆様に御覧いただきたく御案内いたします。

期間

平成19年10月2日(火)～21日(日) 土・日曜日も開催

時間

午前9時45分から午後5時30分まで

ただし、木・金曜日は午前9時45分から午後8時まで

講演会

平成19年10月13日(土) 午後2時から

「日中伝統文化の今日的意義」

講師：石川 忠久 氏(二松学舎大学名誉教授・顧問)

事前申込み制・平成19年9月28日必着(ポスター参照)

講演申込み先：〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園3-2 国立公文書館業務課利用係
(入場は無料)

会場

独立行政法人国立公文書館

住所

〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園3-2

TEL

03-3214-0621(代表)

- URL

<http://www.archives.go.jp>

- (東京メトロ東西線「竹橋駅」1b出口より徒歩5分、東京メトロ東西線・半蔵門線、都営地下鉄新宿線「九段下駅」4番出口より徒歩12分)

平成19年10月号(電子化38号)

- NATIONAL DIET LIBRARY
- 発行／国立国会図書館総務部

- ISSN 1344-8412

[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)



「第9回図書館総合展」開催のお知らせ



2007年11月7日(水)～9日(金) 10:00～18:00

パシフィコ横浜 展示ホールA

図書館総合展は、図書館を使う人、図書館で働く人、図書館に関わる仕事をしている人たちが、“図書館の今後”について共に考え、「新たなパートナーシップ」を築いていく場です。ぜひご来場ください！

図書館に関する最新トピックをテーマとしたフォーラムを開催！
第9回図書館総合展フォーラム(図書館総合展主催者フォーラム)

■ 「図書館は無料貸本屋から変わったか？-3人のプロによる検証

講師	片山 善博(慶應義塾大学大学院法学研究科特別研究教授・前鳥取県知事) 佐野 真一(ノンフィクションライター) 常世田 良(日本図書館協会事務局次長・前浦安市立図書館長)
司会・進行	糸賀 雅児(慶應義塾大学文学部教授・中央教育審議会生涯学習分科会委員)

■ 「図書館と図書館員のためのサバイバル講座」

- 「危機管理」図書館は狙われている！-災害・犯罪・トラブルから図書館を守る-

- テクノロジー&デザインドリブンで、こんな図書館できるんじゃない！？
- Library of the Year 2007

その他過去最高のフォーラム数をご用意！（63フォーラム）

詳しくは図書館総合展ホームページアドレス <http://www.j-c-c.co.jp/>をご覧ください！

皆様のご来場をこころよりお待ちしております。

（株式会社カルチャー・ジャパン 飯川昭弘）

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

平成19年10月号(電子化38号)

- NATIONAL DIET LIBRARY
- 発行／国立国会図書館総務部

- ISSN 1344-8412

[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)



最高裁判所図書館の見学記

竹澤 俊之

7月13日、最高裁判所図書館の見学に同行させていただきました。

庁舎に入ると、外観からの印象よりも、明るく、モダンな雰囲気がありました。

最高裁判所についての説明をしていただいた後、大法廷を見学させていただきました。大法廷の天井は円筒形で高く、照明を消すと、上から外の光が差しこみ、厳粛な空気に包まれ、その場所の権威が伝わってくるようでした。

大ホールは吹き抜けになっており、自然の光が多く採り入れられていて、明るく、とても広い場所でした。ここでは、発足50周年を記念して演奏会を行ったこともあるそうです。また、左右にブロンズ像があり、「正義」という作品は、ギリシャ神話の法の女神テミスモデルとして、右手には剣を、左手には秤を持ち、法の厳格さを表しているそうです。「椿咲く丘」という作品は、少年と少女がベンチで鳩と戯れる姿が表現されており、平和を表しているそうです。

図書館に入ると、広いラウンジがありました。壁には聖徳太子の智仁勇を表す絵画が掛かり、その下の、増島六一郎博士とボアソナード博士の胸像に凜とした趣を感じます。

また、法関係の貴重書の展示もあり、静かで、とても雰囲気のある空間でした。法令集や判例集など、法律専門書を中心に、和図書約16万冊、洋図書約10万冊、合計約26万冊を所蔵し、洋書については、英米の判例集が特に整備されているそうです。また、資料の分類については、法律専門の図書館らしく、法律分野に重点を置いていました。特殊なコレクションとして、幕末から大正初期刊行の法律書を保存した「明治文庫」、増島六一郎博士の英米法関係コレクションである「正求堂文庫」があるそうです。

資料の貸出から返却までをシステムで管理し、検索用の端末も多く、利用しやすい環境が整っていました。また、全国の裁判所をサービスの対象としているため、多数のレファレンスが寄せられるそうです。

一般の方でも、学術研究を目的とする18歳以上の方であれば、事前に予約をすることで、図書館を利用することができるそうです。インターネット上には、蔵書検索システムを公開しているので、来館せずに蔵書の検索もできます。

実際に支部図書館を訪れることで、図書館の雰囲気などを知ることができ、図書館の職員の方々と顔を合わせて話もできて、とても有意義な時間を過ごすことができました。

またこのような機会がありましたら、是非参加させていただきたいと思います。

最高裁判所

<http://www.courts.go.jp/saikosai/>

最高裁判所図書館

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

平成19年10月号(電子化38号)

- NATIONAL DIET LIBRARY
- 発行／国立国会図書館総務部

- ISSN 1344-8412

[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)



日誌(平成19年7月～平成19年9月)

平成19年

7月1日	支部図書館長異動 財務省図書館長 工藤 義明 (前 細谷 章)
7月6日	支部図書館長異動 文部科学省図書館長 尾崎 春樹 (前 田中 敏)
7月10日	支部図書館長異動 日本学術会議図書館長 中田 昌和 (前 會田 雅人) 総務省図書館長 阪本 泰男 (前 吉崎 正弘) 国土交通省図書館長 遠藤 誠之 (前 飯塚 裕) 国土交通省図書館 北海道開発局分館長 河畑 俊明 (前 古澤 清崇) 海上保安庁図書館長 鈴木 章文 (前 黒田 晃敏)
7月13日	特別研修「 見学会:支部最高裁判所図書館の見学 」 14館 20名
7月20日	特別研修「見学会:三菱重工業株式会社技術企画部情報センター」 7館 9名
7月20日	支部図書館長異動 金融庁図書館長 田内 義朗 (前 鈴木 均)
7月25日	平成19年度第1回中央館・支部図書館協議会幹事会
7月26日	平成19年度第1回中央館・支部図書館協議会
8月24日	支部図書館長異動 厚生労働省図書館長 小山 浩一 (前 福島 康志)
9月7日	平成19年度行政・司法各部門支部図書館職員司書業務研修 「オリエンテーション」「図書館学入門」
9月18日	平成19年度行政・司法各部門支部図書館職員司書業務研修 「分類法入門」

9月19日	平成19年度行政・司法各部門支部図書館職員司書業務研修 「レファレンス入門-人文分野」「レファレンス入門-経済社会分野」
9月21日	平成19年度行政・司法各部門支部図書館職員司書業務研修 「国会分館(議事堂内図書館)について」
9月25日	平成19年度行政・司法各部門支部図書館職員司書業務研修 「目録法入門」
9月28日	平成19年度行政・司法各部門支部図書館職員司書業務研修 「雑誌記事索引について」「交流会」

[前の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)